

説明的文章に関わる思考語彙の指導

Instruction of vocabularies for thinking used in explanatory texts

長谷川 栄子・松田 智子
Eiko HASEGAWA, Tomoko Matsuda

要旨 (Abstract)

思考語彙指導の重要性を再確認した上で、学習指導要領（平成 29 年）小・中学校国語科で取り扱われる「情報の扱い方に関する事項」と思考語彙の指導及び思考力育成との関連を探ることとする。

思考操作を授業に取り入れ、言葉と操作を一致させる思考語彙の指導が思考力育成の上で重要となる。思考力は、これまでも言語活動を通して育成してきたはずだが、「情報の扱い方に関する事項」の内容により一層焦点化させ、系統化を図っている。学習基本語彙から思考語彙を選択し、語彙と操作レベルを一体化させて思考力を育成することが重要である。

キーワード：(思考語彙) (思考力育成) (説明的文章) (情報の扱い方)

I. はじめに

中央教育審議会答申において、小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがあると指摘されているように、語彙は、すべての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となる言語能力を支える重要な要素である。国語科のみならず他教科・領域において思考力が問われる学習場面で、知識体系が言語化されて基本概念となり、知識となる点において語彙指導は重要である。

しかし、思考力育成に関わる思考語彙は、学習基本語彙や国語科学習基本語彙で明確にされているにもかかわらず、語彙指導においてその重要性を位置付けられ、指導されてきたわけではない。先行研究を見ても、語彙指導における語彙の深化に関する学習がどのように位置付けられているかが、はっきりしなかった。今後も、語の意味を理解することから始まり、語と語の関連を付け、体系化を図り、語感を育てていくような語彙の深化を図る学習が、継続して求められる。

自分の考えを相手によくわかるように伝えられる、批判的思考力も備えた言語生活者を育てるという観点からみると、教科書教材や学習資料のどのような語彙が重要となり、学習されなければならないのだろうか。教科書教材の語についての学習だけであると、学習者主体の視点に立った語彙指導にはならない。語彙について確かな目をもち教材研究できるかが教師に問われることになる。子どもたちの語彙力を育てるためには、目の前の子どもの語彙力の実態をとらえ、教科書の語彙にとどまらず、『分類語彙表』(1964)や国語科学習基本語彙を活用して、語彙指導を行う必要がある。

拙稿では、思考語彙を人間の思考・認識・知解を表す語彙と定義し、使用する。そして、児童期における子どもたちの思考語彙の発達実態を語彙力の構造に即した調査を基にして捉え、小学校における思考語彙の指導を提案する。

II. 思考語彙の重要性

(1) 国語力において

ここでいう国語力とは、国語科学習で培われる狭義の国語力とは異なる力である。国語力は、国語／日本語、外国語／母語、国語科／他教科という対比においてその姿を表す。文化庁において諮問された「これからの時代に求められる国語力について」(2002)によると、学力論が時代や社会の要請によって国語力、さらに日本語力へと移行している。

他教科の教科書に掲載された思考語彙を調査して明らかになったことは、国語科以上に思考語彙が登場することである。全教科領域に共通して育成される能力の一つとして論理的思考力が挙げられているので、思考語彙は、国語科に限らず、各教科・領域において活用することができる。ただ、他教科における思考語彙の理解は、具体的操作を通して行われるので、一語ずつの理解は図られるが、語彙として体系的に理解が図られているとは言い難い。教科固有の思考語彙は、各教科で指導しつつも、学習者が語彙の体系化を図り、運用し、言語生活力へと育むことができるような学習が必要である。この点において、他の語句との体系的関連性を問う語彙指導が、重要となる。

その際、活用できるのは『語彙分類表』、学習基本語彙や国語科教育基本語彙である。全教科で思考力育成の基礎基本となる思考語彙を捉え直す必要がある。子どもたちが、思考語彙を理解し、表現できるようにすることは、思考や認識の幅を広げることになり、自分自身の思考にも生かされることになる。

(2) 説明的文章に関わる思考語彙の調査研究において

筆者が行った説明的文章に関わる思考語彙の調査研究(2002)の概要を先行研究として以下に紹介し、それから得られた課題をどのように2020年小学校国語科「情報の扱い方に関する事項」や思考語彙の指導に生かし、思考力を育成するかを探ることにする。

①目的

子どもたちが、説明的文章に関わる思考語彙をどのように理解し、どのように思考語彙を表現するのかについて調査することによって、児童期における思考語彙の発達を捉えることを目的とする。

②方法

思考語彙の調査は、小学校国語科「書くこと」の領域の単元を指導する中で行った。調査対象は、第3学年、小学校3校111名、第5学年小学校2校61名である。調査時期は、調査i～viii(viを除く)については、2002年5月～6月、調査viについては、2002年11月～12月である。

③調査内容

語彙力の構造である3つの機能に即した1 対象指示機能—i 思考語彙46語使用度、ii「思う」と「考える」の意味の差異性認識、iii「思う」と「考える」の活用力、iv「思う」と「考える」の用法理解、v 思考語彙11語の理解、2 カテゴリー的意義機能—vi 思考語彙46語カテゴリー認識、3 結合的意義機能—vii 説明的文章の感想に表現された思考語彙、viii 説明的文章に表現された思考語彙、

という調査内容である。

④結果

調査 i では、第 3 学年が、調査 ii、iv～viii では、第 5 学年が高い値を示した。調査 iii では、学年差を判断できなかった。調査 i の思考語彙 46 語使用度の傾向は、概ね似ている。使用度の高かった上位 10 語は、①わかる、②考える、③思う、④気づく、⑤決める、⑥当てる、⑦確かめる、⑧信じる、⑨予想する、⑩感じる、であった。

一方、使用頻度の低かった 10 語は、①悟る、②危ぶむ、③類推する、④抱く、⑤汲み取る、⑦推測する、⑧予期する、⑨見立てる、⑩察する、であった。

調査 v の思考語彙 11 語の理解では、第 5 学年の方が高い理解度を示した。

⑤考察

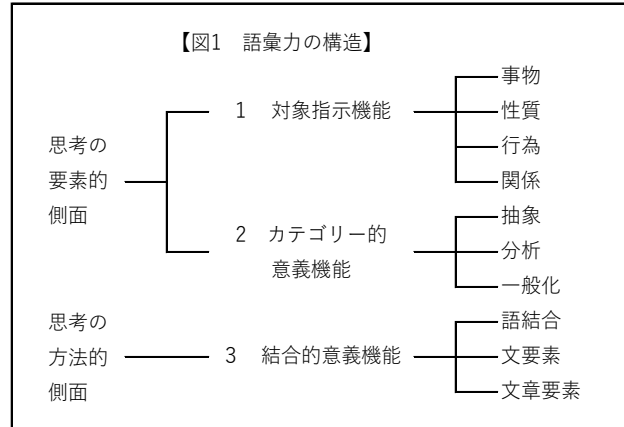
5 つの対象指示機能に関する調査から明らかになったことは、第 3 学年の子どもたちは、内省するという思考をまだ十分に行っていないのに対し、第 5 学年の子どもたちは、内省し、語感を捉えて答えようとしていることである。それは、自己の心的状態を見つめようとする表れである。しかし、彼らにとっても対象指示の難しさが見られた。心的状態の違いを捉えて思考語彙を使用し、組織化を図り、語感を磨くような語彙指導をするには、第 5 学年という時期が適当であると考えられる。

カテゴリ認識調査から明らかになったことは、第 3 学年の子どもたちは、語の意味の差異が捉えにくく、類義語の意識が希薄であるということである。一方、第 5 学年の子どもたちは、一語ずつの判断であっても、個人の中で類義語としてグループづくりをしようとし、カテゴリ意識が少なからず育ってきていると示唆される。

結合的意義期の意調査から明らかになったことは、両学年の子どもたちともに説明的文章の感想文における「思う」の活用が極めて高いことである。それに対して、文中の思考語彙の活用実態は、低い。思考語彙を指導する様式としては、感想文を書くだけでは不十分であろう。子どもたちが説明的文章に表出した思考語彙を分析すると、第 3 学年の子どもたちは、基本的な思考語彙を使おうとし、自己の心的状態を読み手という他者の視点で客観視することは、難しいことが分かる。第 5 学年の子どもたちは、①基本的な思考語彙を知って使い分けしようとする、②読み手に投げかけ、段落を進める、③モダリティによって心的状態を表そうとする表現ができた。そこから、自分の心的状態を見つめ、その意義を捉え、書こうとしている表れが示唆される。自己の視点から読み手への視点へと転換でき、読み手を意識した文字表現を行っている。このように、第 5 学年の子どもたちと第 3 学年の子どもたちの学年差が表れた。

(3) 思考語彙を高める授業過程において

語彙指導において重要な点は、井上 (2001) や塚田・池上 (1998) らが主張するように、学習の主体者としての子どもたちが、語彙レベルでも文章を捉えることができ、言語生活力に生かされるよう



授業を構想することである。語彙指導は、4観点から考え、①取り立て指導—クロスワードを作ろう、仲間分けをしよう、4コマ漫画をかこう、②説明活動における指導—考えた道筋を分かりやすく説明しよう、いろいろな角度から考えて伝え合おう、③文学における指導—作者にインタビューしよう、④表現単元における指導—新聞記事を読んで意見文を書こう、という単元を構想した。

語彙指導において、子どもたちの実態を踏まえた学習は、子どもの発達を視野に入れた個性化を図る授業に発展する。思考語彙を高める授業は、自己の何気ない心的状態を見つめ、言葉に表現する学習となり、人間の心を探る興味ある学習となる可能性をもつ。思考語彙を駆使する学習場面では、語を選択する過程において思考力が働き、メタ認知を育てることになる。率直に心的状態を話し、伝え合うことは、自己及び他者理解へと通じる。このように、思考語彙を高める学習は、思考力の基礎基本を育成する学習となる。

課題として、①思考力を育てる語彙指導として、どのような語彙をいつ指導するのが適当であるか、②国語科学習基本語彙に選定できる思考語彙を探る、③子どもたちの実態を調査しながら、思考語彙を高める授業をさらに開発する、ことが挙げられる。

Ⅲ. 新学習指導要領国語科における位置付け

前節では、思考語彙の指導の重要性を述べてきた。学習指導要領(平成29)における小・中学校国語科の内容は、〔知識及び技能〕及び〔思考力、判断力、表現力等〕から構成されている。それでは、思考語彙の指導が、どのように位置付けられているかを確認しよう。

(1) 〔知識及び技能〕において

〔知識及び技能〕の内容は、「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」、「(2)情報の扱い方に関する事項」、「(3)我が国の言語文化に関する事項」から構成されている。

①言葉の特徴や使い方に関する事項

「語彙」は、「言葉のはたらき」、「話し言葉と書き言葉」、「漢字」、「文や文章」、「言葉遣い」、「表現の技法」、「音読、朗読」に関する内容と共に整理され、次のように系統的に示された。

	(小)第1学年及び第2学年	(小)第3学年及び第4学年	(小)第5学年及び第6学年
語彙	オ 身近なことを表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には意味による語句のまとまりがあることに気付き、語彙を豊かにすること。	オ 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにすること。	オ 思考に関わる語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにすること。また、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うこと。
	(中)第1学年	(中)第2学年	(中)第3学年

語彙	ウ 事象や行為、心情を表す語句の量を増すとともに、語句の辞書的な意味と文脈上との関係に注意して話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにする。	エ 抽象的な概念を表す語句の量を増すとともに、類義語と多義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句などについて理解し、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。	イ 理解したり表現したりするために必要な語句の量を増し、慣用句や四字熟語などについて理解を深め、話や文章の中で使うとともに、和語、漢語、外来語などを使い分けることを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。
----	---	--	--

小学校段階における思考に関わる語句が、「身近なことを表す語句」、「行動、気持ちを表す語句」、「思考に関わる語句」と抽象度が増して扱われる。中学校においては、「行為、心情」、「抽象的な概念」を表す語句が扱われ、さらに抽象度が高まる。話すこと・聞くこと、書くこと、読むことの指導に関連させて、子どもたちの理解語彙から表現語彙になるよう指導したい。

「言葉には、性質や役割によるまとまりがあることを理解」する小学校の段階から、「語感や言葉の使い方に対する感覚を意識」することへ進み、中学校での「語感を磨き語彙を豊かにすること」に到達する。中学校に至る系統性を認識して、各段階で指導を行いたい。

②情報の扱い方に関する事項

新しく登場した内容である。思考語彙が関連するので、一覧にして概観する。

	(小) 第1学年及び第2学年	(小) 第3学年及び第4学年	(小) 第5学年及び第6学年
情報と情報との関係	ア 共通、相違事柄の順序などの情報と情報との関係について理解すること。	ア 考えとそれを支える理由や事例、全体と中心などの情報と情報の関係について理解すること。	ア 原因と結果など情報と情報との関係について理解すること。
情報の整理		イ 比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の仕方、辞書や事典の使い方を理解し使うこと。	イ 情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと。
	(中) 第1学年	(中) 第2学年	(中) 第3学年
情報と情報との関係	ア 原因と結果、意見と根拠など、情報と情報との関係について理解すること。	ア 意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解すること。	ア 具体と抽象などの情報と情報との関係について理解を深めること。
情報の整理	イ 比較や分類、関係付けなどの情報の整理の仕	イ 情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使	イ 情報の信頼性の確かめ方を理解し使うこと。

	方、引用の仕方や出典の示し方について理解を深め、それらを使うこと。	うこと。	
--	-----------------------------------	------	--

その具体的指導については、新しい教科書の編集に期待したい。

(2) [思考力、判断力、表現力等] において

学年の目標において、思考力育成に関する事項を抜粋すると、次の通りである。

	(小) 第1学年及び第2学年	(小) 第3学年及び第4学年	(小) 第5学年及び第6学年
考える力	順序立てて考える力 感じたり想像したりする力	筋道立てて考える力 豊かに感じたり想像したりする力	筋道立てて考える力 豊かに感じたり想像したりする力
自分の思いや考え	もつこと	まとめること	広げること
	(中) 第1学年	(中) 第2学年	(中) 第3学年
考える力	筋道を立てて考える力 豊かに感じたり想像したりする力	論理的に考える力や共感したり想像したりする力	論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力
自分の思いや考え	確かなものにすること	広げたり深めたりすること	広げたり深めたりすること

国語科において論理的に考える力を育成することと関連させながら、他教科・領域においても思考力を育成すること、教科固有の論理的思考力を育成することが問われる。

[思考力、判断力、表現力等] は、A話すこと・聞くこと、B書くこと、C読むことの3領域の内容で構成されている。内容に示された思考操作を抜粋して概観する。

(小) 第1学年及び第2学年	(小) 第3学年及び第4学年	(小) 第5学年及び第6学年
話題を決める。必要な事項選ぶ。時間や事柄の順序を考える。感想をもつ。発言を受けて話をつなぐ。想像する。見つける。確かめる。良いところを見付ける。	比較する。分類する。必要な事項を選ぶ。理由や事例を挙げる。質問する。自分の考えをもつ。共通点や相違点に着目する。段落相互の関係を考える。構成を考える。自分の考えとそれを支える理由や事例の関係を明確にする。良いところを見付ける。要約する。	分類する。関係付ける。事実と感想、意見とを区別する。比較して、自分の考えをまとめる。計画を立てる。選ぶ。構成を考える。要旨を把握する。表現の効果を考える。共有する。文章と図を結び付ける。論の進め方について考える。
(中) 第1学年	(中) 第2学年	(中) 第3学年
話題を決める。整理する。検討する。構成を考える。共通点や	話題を決める。想定する。整理する。検討する。全体と部分を	話題を決める。想定する。整理する。検討する。ものの見方や

相違点を踏まえる。関係を捉える。要旨を把握する。結び付ける。解釈する。考えを確かなものにする。	捉える。解釈する。論理の展開について考える。文章と図表などを結び付ける。考えを広げたり、深めたりする。	考え方について考える。評価する。意見をもつ。
---	---	------------------------

こうして概観してみると、思考操作を繰り返し授業過程に取り入れ、互いの考えの共通点や相違点を検討することが、深い学びにつながる。〔知識・技能〕における理解して使うことができることと思考力との関係をどのように区別して評価するのが難しく、今後の指導において課題となるだろう。

IV. 思考語彙の指導

(1) 思考語彙の指導における留意点

甲斐(1991)は、説明的文章の重要語句に着目し、要約する学習活動を構想した。キーワードから説明的文章をとらえた。塚田(2001)は、意味マップを提唱し、作品中の語やそれらから連想する語を関連付けている。どのように子どもたちが作品を理解したかがよくわかる。両者は、言葉に着目しながらも読解中心の作品主義の視点が見える。その流れの中で、井上は、尾崎(1993)らと共に子どもたちを読者として、学習者として位置付け、研究を実践授業にかけている点が注目できる。尾崎らの実践研究の他にも、物語の中に表現される遊びに関する語彙を集め、実際に遊んでみたり、遊びの言葉を使って物語を創作させたりしている。

今後の語彙指導において重要な点は、井上(2001)や塚田(2002)らが、主張するように学習の主体者としての子どもたちが、語彙レベルでも文章を捉えることができ、国語生活力に生かされるよう授業を構想することである。主体的・対話的で深い学びを目指した思考語彙を指導する授業過程において、①思考語彙を駆使させる、②思考操作を行わせる、③対話的学習を行い、学びを深めさせるの3点に留意して単元を提案する。

①思考語彙を駆使させる

学習材によって思考語彙を知ったとしてもそれはまだ知識を得た段階にしか過ぎない。子どもたちが言語操作を行い、あらゆる学習場面で慣れ、活用し、駆使することによって定着し、自分の言葉となる。新しい言葉に対する興味関心、新しい言葉を使ってみたいという意欲、使ってみたら成長した気分になったという評価を味わいながら思考語彙を駆使させたい。相互評価の際には、自分の仕上げた作品と共に自分自身の心的状態を見つめる思考の中で思考語彙が働く。学習の導入から3次にかけて各段階でレベルを高めながら学習できるようにしたいものである。

②思考操作を行わせる

思考力は、自己学習において育成される。課題探求を行う過程において情報収集し、精選し、比較し、分類し、命名する・・・という過程において思考力が働くのである。子どもたち自らが、思考操作や言語操作を行いやすいように学習のワークシート作りを工夫することが鍵となる。

③対話的学習を取り入れ、学びを深めさせる

自己学習における思考操作過程の後、グループによる検討によって考えの共通点、相違点が明らかになり、自分の考えを再考することになる。多様な考えがあることに気づき、自己の考えの立場を問われ、

判断力が育成される。対話する必然性を生み出し、切り返す発問によってより一層思考力が高められる。

(2) 思考語彙のカテゴリー認識を育てる語彙指導

単語の意味理解だけでなく、網の目のように関連する言葉の意味構造をとらえ、体系化を図ることが語彙の増加へと結びつく。言葉を捉える一つの視点として意味から仲間分けをし、言葉の重層的な構造をとらえさせたい。カテゴリー的意義機能を捉えるには、高学年が適当だと考え、この時期に配当し、単元を構想した。

①単元名 思考語彙を仲間分けしよう

②教材 思考語彙表、国語辞典

③単元の指導目標

i) 国語辞書で思考語彙の意味を調べることができる。

ii) 思考語彙の意味を理解し、使用する際の心的状況を説明することができる。

④単元の評価規準

ア 国語辞典を使って言葉の意味を調べている。

イ 語感の違いをとらえ、言葉を選んで説明している。

⑤単元の授業過程（全1時間）

次	時	学習活動	指導の留意点	評価規準
一	1	①カテゴリーの視点を自分なりに決めて思考語彙を分類する。 ③グループ内で、カテゴリーの視点を説明し合い、比較する。 ④カテゴリーの視点について自己の考えと思考語彙表を比較して気付いたことについて振り返る。	○思考語彙表から選んだ思考語彙をカードに仕立て、配布する。 ○意味の不確かな言葉は、国語辞典で確認させる。 ○言葉の多義性に気付かせる。	ア国語辞典の使い方を理解し、意味を選択している。 イ語感の違いを捉え、言葉を選んで説明している。

(3) 表現様式によって使用される思考語彙の違いを捉える

新聞記事には、論説文、報告文、書評、意見文、解説文などが掲載されている。表現様式によって使用される語彙も違う。表現様式によって使用される思考語彙を理解し、それらの語を選択して使用し、意見文を書くことにした。意味の差異性に注意して運用することは、この時期に適していると考えた。文章、構成、語彙の各レベルで個性化を図るよう単元を構想した。

①単元名 新聞記事を読んで意見文を書こう

②教材 各社の子ども新聞

③単元の指導目標

i) 興味関心のある新聞記事に対して自分の意見をもとめと情報収集することができる。

ii) 記事の主張と比較して自分の考えをもち、意見文を書くことができる。

iii) 図、グラフ、表などと結び付けて効果的に書くことができる。

iv) 思考語彙を使って自分の考えを書くことができる。

④単元の評価規準

ア 興味関心のあることについて情報を収集し、選択しようとしている。

イ 自分の考えの中心を落とさず伝えようとしている。

ウ 図、グラフ、表などの効果を知って、選択して用いている。

エ 思考語彙を使って書いている。

⑤単元の授業過程（全11時間）

次	時	学習活動	指導上の留意点	評価規準
一	1	①子ども新聞の記事を分担して読み、思考語彙に線を引く。 ②どのような記事にどのような思考語彙が使われているか、どのような様式に使われることが多いかを整理する。	○子ども新聞を児童数配布する。 ○記事の種類で分類させる。 ○思考語彙を分類して掲示する。	エ 思考語彙に関心をもっている。
	2	③学習課題「思考語彙を使って意見文を書こう」を設定し、学習計画を協議する。	○家庭でもニュース番組や新聞記事に注意しておくよう確認する。	ア 情報に関心をもって収集しようとしている。
二	3	④興味関心のある記事について調べの方法を交流する。 ⑤自分の考えをもつために調べながら新聞記事を読む。	○収集した資料の中から必要な資料を選択できるような視点を提示する。	ア 興味関心のあることについて情報を収集し、選択しようとしている。
	4	⑥意見文の構成メモを書く。	○頭括型と尾括型から選ばれる。	イ 自分の考えの中心を明確にしている。
	5	⑦引用の方法を確認する。	○直接引用と間接引用について押さえる。	
	6	⑧グラフや表などと結び付け、結果を効果的に表し、意見文を下書きする。	○困ったときには、新聞記事を見直し、文章を書くときの参考にさせる。	ウ 図、グラフ、表などの効果を知って、選択して用いている。
	7			
	8	⑨意見文を読み合い、観点に沿って相互評価する。	○思考語彙の使用は適切か、引用は適切か、資料と結びつけているか、構成についてという観点から評価させる。	エ 思考語彙を使って書いている。
	9	⑩意見文を清書する。	○既習の漢字を使用させ	

			る。	
三	10	⑪グループで意見文を読み合い、互いの考えの共通点や相違点を交流する。	○考えの共通点や相違点を捉えるようにさせる。 ○グループのメンバーを変えて読み合う。	イ自分の考えと比較し読んでいる。
	11	⑫学習について振り返る。	○評価の観点について自己評価させる。	

V. 終わりに

以上、思考語彙の指導の重要性を検討してきた。国語科力にとどまらない国語力育成において思考語彙は、重要である。

調査から明らかになったことは、中学年の子どもたちは、①思考語彙の意味内容について細分化してとらえていない、②上位概念の言葉で代用しているという実態がとらえられたということである。それで、正しく使用できなかつたり、カテゴリ認識が不十分であったりする。語彙力としては、未分化の発達段階といえよう。語の意味を判断し、的確に使用する学習が設けられていないという問題点がある。

それに対して、高学年の子どもたちは、思考語彙を使って表現してみようとするようになる。意味カテゴリにおいても個人内での整合性をつけようとする姿勢が見られる。しかし、思考語彙を単元の学習に位置付けると効果は見られるが、定着させるには、繰り返し機会をとらえて学習する必要がある。

思考語彙を理解し、運用することを通して多様な思考を経験し、語彙と思考の一体化を図る学習が、「情報扱い方」において実践研究されることを期待する。

【参考文献】

小学校学習指導要領、文部科学省（平成 29）

小学校学習指導要領解説 国語編、文部科学省（平成 29）

「これからの時代に求められる国語力について」文化庁（2002）

『語彙分類表』国立国語研究所（1964）秀英出版

『語彙力の発達とその育成－国語科学習基本語彙の設定の視座から－』井上一郎著（2001）明治図書

『語彙指導の革新と実践的課題』塚田康彦・池上幸治著（1998）明治図書

『語彙力と読書』塚田泰彦著（2001）東洋館出版

「学習者の既存の語彙知識を喚起し改変する方法」『教育科学国語教育 No. 626』塚田泰彦著（2002）明治図書

「『ヤドカリの引っ越し』『ありの行列』全授業の展開と研究」『実践国語研究別冊 1993 年 No. 131』尾崎靖二著（1993）明治図書

『語句に着目した読み方指導小学校 3・4 年説明文教材』甲斐睦朗著（1991）明治図書

「国語科学習基本語彙研究の成果」『国語科教育学研究の成果と展望』甲斐睦朗著（2002）全国国語教育学会編明治図書